

### 2-3 クリップ提示

調査者の一人が、障害のある学生の学生生活について紹介すると共に、障害のある学生自身が自らにとって必要な支援方法についてレクチャーを行い、障害支援の経験がない一般学生の理解を促進することを目的として、e-learning コンテンツである「障害のある学生の理解と支援のためのビデオクリップ」を作成した。このコンテンツは、平成17年2月現在、全盲の学生と車いすに関するビデオクリップが作成されているが、本研究では、「車いすの学生」に関するビデオクリップを提示教材として用いた。

このビデオクリップは、QuickTimeムービーとして保存され、利用者制限を付けた上で、World Wide Web (WWW) コンテンツとして公開される予定になっている。「車いすの学生」に関しては、以下に示す11のトピックと、全てのトピックの一括再生から構成されており、それぞれのハイパーリンクをクリックすると、ビデオクリップが自動的に再生されるように作成された（図1参照）。

- (1) 自己紹介 (4分6秒)
- (2) 車いす介助の方法1 (4分12秒)
- (3) 車いす介助の方法2 (2分2秒)
- (4) ノートの取り方 (1分36秒)
- (5) エレベータを利用した移動 (1分48秒)
- (6) 階段昇降機を利用した移動 (3分3秒)

- (7) 食事の際の工夫と介助 (4分40秒)
- (8) トイレでの介助 (5分2秒)
- (9) キャンパスまでの移動 (3分41秒)
- (10) 日常生活の様子 (6分39秒)
- (11) 要望や後輩へのメッセージ (3分44秒)
- (12) 全てのクリップの一括再生 (49分18秒)

### 2-4 教示

調査者は、事前アンケートへの回答課題を実施する前に、研究参加者に対して以下の教示を行った。

＜教示＞

「私たちは、現在様々な障害を持った方達の生活を支援するために、障害者が日常生活で困っていること、支援を必要としていることについて、ボランティアや仕事で障害者の支援・介護をしている人たちに紹介するビデオクリップを作成しています。

今回、参加していただく研究は、それらのクリップを利用することで、どのくらい学習効率が向上するかを評価するためのものです。

今から、あなたには、肢体不自由のために車いすを使用している方についてのビデオクリップを見て、支援の方法やポイントを学習していただきます。

具体的には、コンピュータのWEBブラウザで、ビデオクリップを見てもらい、その後、そのビデオクリップに関する簡単な

テストに答えてもらうということになります。

ただし、テストといっても、大学の入試験のように成績を競い合うものや、心理テストのように性格を測定するものではなく、あくまでも障害のある人に対して的確な支援をするための知識が伝達できたか否かを問うものですから、あまり緊張しすぎず、リラックスしてビデオクリップをご覧ください。

途中メモをとっても構いませんが、テストの時にはメモはみないで行ってもらいま

すので、ビデオクリップの内容については、よく理解し、覚えておくよう心がけてください。

なお、学習時間は40分間です。

それでは、あなたに見ていただくビデオクリップはこちらになります。

(ブラウザを立ち上げる)

こちらに複数のトピックが並んでいます。

また、それらをまとめて一括再生できるようにしたものが、こちらになります。

トピックに分かれたビデオクリップも、一括再生のビデオクリップも、全てを最初

障害のある学生の理解と支援のためのビデオクリップ

目次

1. 車いすの学生
  - 自己紹介
  - 車いす生活の実際
  - 車いす生活の悩み
  - 車いす生活の楽しみ
  - 車いす生活のサポート
  - 車いす生活の未来
  - 車いす生活の希望
  - 車いす生活の現実
  - 車いす生活へのメッセージ
2. 車いすの学生に関するクイズ

車いすを利用する学生のキャンパス・ライフと支援

1. 自己紹介

2. 車いす生活の実際

ビデオクリップ：車いすの学生のキャンパス・ライフと支援

場面1：自己紹介

再生

図1 提示した e-learning コンテンツの例

から最後まで見ようとすると 50 分弱かかります。しかし、学習時間は 40 分間ですから、早送り等、ご自分で時間調整をしながら視聴してください。

全てのトピックと、一括再生のビデオクリップは、それぞれのリンクをクリックすると自動的に再生されます。

どのリンクを使って、どのような順番で見ても構いませんので、車いすを使用している人の支援について把握し、後のテストでそれらを答えられるようにしておいてください。

それでは、ビデオを見始める前に、こちらのアンケートに記入してください。」

### 3 結果と考察

#### 3-1 研究参加者の特性

ビデオを使用する前に実施したアンケートの中で、「家族・知人・友人の中に、車いすを使用している人がいるか」という項目に対して、「いる」と答えた研究参加者は 3 名、「いない」と答えた研究参加者は 6 名であった。「いる」と答えた人に関して、車いす使用者との関係性を尋ねたところ、「家族」1 名、「親戚」2 名、「知人」1 名（のべ人数）であった。

また、「これまで車いす使用者の支援を行った経験はあるか」の項目に対して、2 名

が「ある」と答え、7 名が「ない」と答えた。

「これまで車いす使用者の支援に関するテレビ番組や書籍を読んだことがあるか」の項目に、「ある」と答えたのは 7 名、「ない」と答えたのは 2 名であった。

最後に、「障害者の支援・介護に係わる職業・ボランティアに興味があるか」という項目に対しては、6 名が「ある」と答え、3 名が「ない」と答えた。

#### 3-2 トピック別ビデオクリップと一括再生型ビデオクリップの比較

トピック別ビデオクリップと一括再生型のビデオクリップのどちらが多く利用されていたかを検討するために、クリップ視聴中の録画映像から、研究参加者が視聴したクリップの順番を整理したものが、表 1 である。この結果より、一括再生のビデオクリップを用いたのは、研究参加者 5 のみであり、他の研究参加者は一括再生のビデオクリップを用いなかった。研究参加者 5 に関しても、録画映像を確認したところ、一括再生のみを視聴しており、その他の場面は早送りしていた。

表1 研究参加者が視聴したクリップの順番

研究参加者番号	視聴したクリップの順番
1	1→2→3→5→6→7→8→10→11→9
2	1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→10
3	2→3→4→1→7→8→9→10→6→11
4	1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→10
5	1→2→3→4→5→6→7→1→8→9→10→11→一括再生→一括再生
6	11→2→3→5→6→7→8→10→4→9→1→10→1→4→2
7	1→4→2→3→8→10→11→9→7→1→6
8	1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→1→11
9	1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→1

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. トピック別：自己紹介         | 2. トピック別：車いすの介助方法1    |
| 3. トピック別：車いすの介助方法2    | 4. トピック別：ノートの取り方      |
| 5. トピック別：エレベータを利用した移動 | 6. トピック別：階段昇降機を利用した移動 |
| 7. トピック別：食事の際の工夫と介助   | 8. トピック別：トイレでの介助      |
| 9. トピック別：キャンパスまでの移動   | 10. 日常生活の様子           |
| 11. 要望や後輩へのメッセージ      | 一括再生. 全トピックの一括再生      |

次に、「一括再生のビデオクリップと、トピックに分かれたビデオクリップでは、どちらが学習しやすかったと思うか」というアンケート項目に対して、9人中7人がトピック別クリップの方が学習しやすかったと答えた。

「一括再生型のクリップが学習しやすかった」と答えた研究参加者が1名おり、学習しやすかった理由として「トピックに分かれていても、結局最初から順番に見たため。早送りや一時停止は自分で調整出来たため一括再生で十分」と答えていたが、この研究参加者も実際は一括再生型のビデオクリップは視聴していなかった。

また、「その他」と答え、「片方しかきちんと見ていないので比較出来ない」と自由

記述回答した研究参加者も1名いたが、この研究参加者も、実際には一括再生型を視聴していなかった。

これらのことから、限られた時間の中でビデオクリップを視聴する場合、一括再生型のビデオクリップではなく、トピック別に分かれたクリップの方が利用されやすいことが示された。

### 3-3 ビデオクリップ視聴前後の車いす利用者に対するイメージ

ビデオクリップの視聴前後で、視聴者が車いすユーザに対してどのようなイメージを持ち、どのように変化するかを、アンケート項目に含まれるSD尺度を用いて測定した。

本項では、イメージの変化に着目し、視聴前のSD約度値と視聴後のSD約度値の差を算出するため、以下の式を用いた。

(ビデオクリップ視聴前後の車いす利用者に対するイメージの変化値) = (視聴前のイメージ) - (視聴後のイメージ) [1]

[1]の算出式を用いると、変化値がプラスの場合、左項の形容詞に近づき、マイナスの場合は、右項の形容詞に近づく。そこで、以下の11項目のSD尺度に関して、算出された変化値を図にしたものを、資料2として添付した。

<形容詞対と変化量>

プラス ← → マイナス	
1. よい	悪い
2. 美しい	醜い
3. 清潔な	不潔な
4. 明るい	暗い
5. 強い	弱い
6. 重い	軽い
7. うっとおしい	さわやか
8. 好ましい	好ましくない
9. やさしい	こわい
10. 親しみのある	よそよそしい
11. 若々しい	年とった
12. 貧しい	豊かな
13. 騒々しい	静かな
14. 活発な	活発でない
15. 地味な	派手な

16. 悲しい	うれしい
17. 楽しい	苦しい
18. 愉快的な	不愉快的な

これらの図を見ると、ほとんどの項目でイメージが変化している傾向が示唆された。したがって、Wilcoxonの符号付順位検定を用いて、1回目のイメージ値と2回目のイメージ値の差の検定を行った(表2参照)。すると、「11. 若々しい一年とった」( $z=-15.50, p=.04$ )「14. 活発な—活発でない」( $z=-14.00, p=.02$ )、「17. 楽しい—苦しい」( $z=-10.50, p=.03$ )で5%水準での有意差が認められ、「若々しい」「活発な」「楽しい」方にイメージが変化していることが示された。

また、「6. 重い—軽い」( $z=14.00, p=.06$ )、「7. うっとおしい—さわやか」( $z=7.50, p=.06$ )で傾向差が認められ、「軽い」「さわやか」な方にイメージが変化している傾向が示唆された。

以上のことから、今回用いたビデオクリップは、研究参加者の車いすユーザに対するイメージを、ポジティブな方向に変化させていることが考えられた。

3-4 障害学生への支援に関するテスト

ビデオクリップ後に行った障害学生への支援に関するテストへの回答については、資料3に添付した。

表2 ビデオクリップ視聴前後のSD尺度値の平均値と分析結果

項目	平均値		Z
	視聴前	視聴後	
1. よい—悪い	3.8	3.2	-5.00
2. 美しい—醜い	4.2	3.7	-3.00
3. 清潔な—不潔な	4.0	3.1	-8.50
4. 明るい—暗い	4.2	3.4	-5.00
5. 強い—弱い	3.2	3.0	-1.50
6. 重い—軽い	2.9	3.7	14.00 †
7. うつとおしい—さわやか	3.8	4.4	7.50 †
8. 好ましい—好ましくない	4.6	4.0	-7.50
9. やさしい—こわい	3.0	3.0	0.00
10. 親しみのある—よそよそしい	3.8	3.1	-4.00
11. 若々しい—年とった	4.7	3.4	-15.50 *
12. 貧しい—豊かな	4.4	5.0	7.50
13. 騒々しい—静かな	5.3	4.9	-7.00
14. 活発な—活発でない	4.9	3.2	-14.00 *
15. 地味な—派手な	2.9	3.2	4.50
16. 悲しい—うれしい	3.2	4.0	5.00
17. 楽しい—苦しい	5.1	4.0	-10.50 *
18. 愉快的な—不愉快的な	4.1	3.7	-1.50

†: p<.10 \*: p<.05

また、回答量を分析するために、各研究参加者の回答をテキストファイルにし、さらにそのテキストファイルを、形態素解析システム（茶筌：奈良先端科学技術大学院大学）を用いて形態素に分解した。各研究参加者の記述に含まれる形態素数は、図2に示す通りである。

質的側面に目を向けると、形態素数には個人差があるものの、ほとんどの研究参加者がビデオクリップの内容を要約的に記述していることが分かる。ただし、研究参加者2に関しては、他の研究参加者の回答や

ビデオクリップの内容とは異なる記述が含まれていた（例：「ノートの取り方」に対して、「音声入力のできるパソコンがあればさらにノートを取りやすいのでは？ あくまで本人がノートを取る方がよいが板書は介助者が取るべき」）。

研究参加者2の特性を見ると、家族・知人に車いすユーザがいると回答しており、これまでも外出の付き添い・トイレ介助等で、車いすユーザの支援を行った経験がある。したがって、「ビデオクリップを見て、車いすユーザの支援に必要なポイントを書

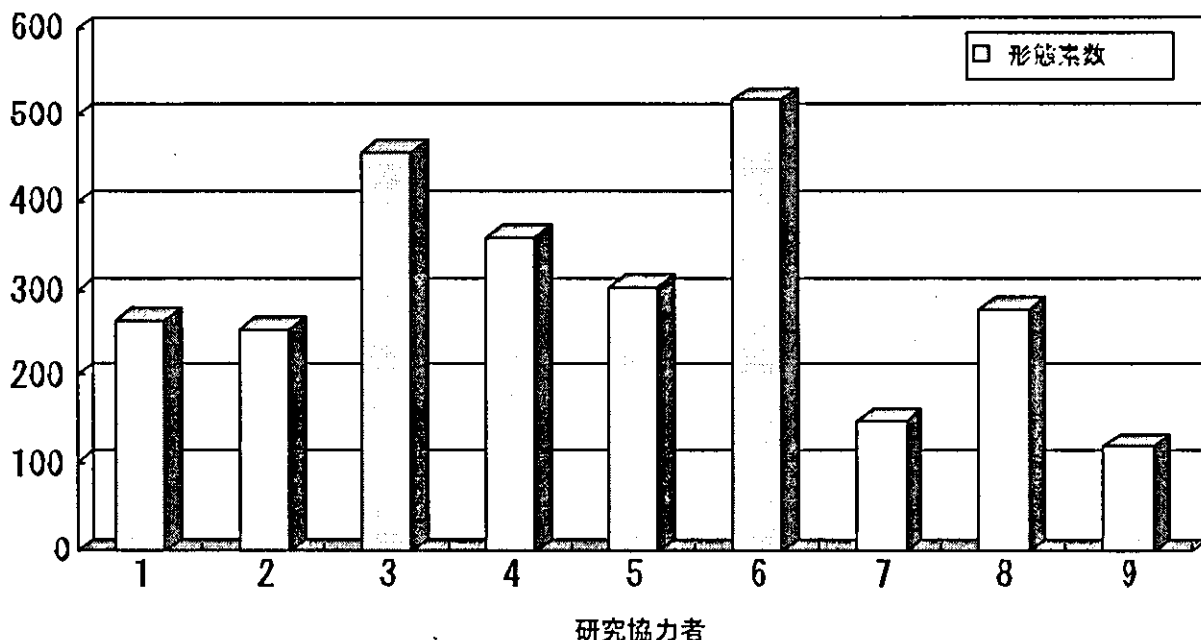


図2 自由記述で用いられた形態素数

き出す課題」という課題に対して、ビデオクリップで提供された情報の再生ではなく、ビデオクリップから自身の経験を想起・連想し、実際の車いすユーザの支援をする上で必要と思われる事柄や考えを回答したと考えられる。ただし、ユーザのニーズ中心で支援すべきという点では、ビデオクリップの内容と一致していた。

### 3-5 ビデオクリップによる新しい知識の獲得

事後アンケートの「車いす使用者の支援について、今回のビデオクリップを見て初めて知ったことはありましたか?」という項目に対しては、全員が「あった」と答えた。

事前アンケートにおいて、これまで車いすユーザへの支援の経験がない人（特に、

テレビや書籍でも車いすユーザの生活について見聞がない人）にとって新しい知識を提供出来たことは当然のこととして、車いすユーザへの支援の経験があると答えた研究参加者が2名、車いすユーザの支援に関するテレビ番組や書籍を見た経験があると答えた研究参加者が7名いた中で、全員が何らかの新しい知識を得たと回答していることは、本研究で用いたビデオクリップ（e-learning コンテンツ）が、多くの支援者にとっても有益であることを示唆している。

## 4 まとめ

本研究の結果より、視聴時間に比して学習所要時間が短い学習事態においては、1) 学習者（視聴者）は一括再生型ビデオクリップよりもトピック別ビデオクリップの方

を用いる、2) 障害当事者自身が登場し、生活場面に応じて支援の方法をレクチャーするビデオクリップは、障害当事者に対するイメージをポジティブな方向に変化させる傾向があり、3) かつ障害当事者の支援を経験したことがある人にとっても支援方法や対応に関して新しい知識を提供しうることを示された。

ただし、本研究は、視聴時間に比して学習所要時間が短い事態を想定しており、時間的に余裕がある場合の学習とは異なる。障害の支援に関しても、障害特性や個人の嗜好によって様々なニーズが存在するように、学習の仕方も様々なタイプが存在する。したがって、今後、時間的余裕がある時に集中して視聴・学習するタイプや、その他の学習タイプ向けの e-learning コンテンツとして、提供すべき内容・効果的な提示方法について検討を加える必要があるだろう。

また、今回は、車いすユーザの支援についてのコンテンツを利用したが、今後多様な障害の支援を取り扱ったコンテンツを作成し、提供することが、障害支援についての理解を広め、障害当事者の生活機能を補完することにつながると考えられる。

## 文献

- [1] 徳田克己・佐藤泰正 1963 弱視児・者に対するイメージに及ぼす弱視児・者に関する知識量の影響 弱視教育 26, 1, 9-17.





## 事前アンケート2

問1：車いす使用者（肢体不自由者）に対して、どのような印象（イメージ）を持っているか、以下の例にしたがい、最もあてはまると思う番号に○をつけてください。

		とても	かなり	どちらかというど	どちらともいえない	どちらかというど	かなり	とても	
例	かたい	1	2	3	4	5	6	7	やわらかい
	よい	1	2	3	4	5	6	7	悪い
	美しい	1	2	3	4	5	6	7	醜い
	清潔な	1	2	3	4	5	6	7	不潔な
	明るい	1	2	3	4	5	6	7	暗い
	強い	1	2	3	4	5	6	7	弱い
	重い	1	2	3	4	5	6	7	軽い
	うっとおしい	1	2	3	4	5	6	7	さわやか
	好ましい	1	2	3	4	5	6	7	好ましくない
	やさしい	1	2	3	4	5	6	7	こわい
	親しみのある	1	2	3	4	5	6	7	よそよそしい
	若々しい	1	2	3	4	5	6	7	年とった
	貧しい	1	2	3	4	5	6	7	豊かな
	騒々しい	1	2	3	4	5	6	7	静かな
	活発な	1	2	3	4	5	6	7	活発でない
	地味な	1	2	3	4	5	6	7	派手な
	悲しい	1	2	3	4	5	6	7	うれしい
	楽しい	1	2	3	4	5	6	7	苦しい
	愉快的な	1	2	3	4	5	6	7	不愉快的な



## 事後アンケート1

問1：ビデオクリップを見終わった後で、身体障害をもつ人に対して、どのような印象（イメージ）を持っているか、以下の例にしたがい、最もあてはまると思う番号に○をつけてください。

		とても	かなり	どちらかというと	どちらともいえない	どちらかというと	かなり	とても	
例	かたい	1	2	3	4	5	6	7	やわらかい
	よい	1	2	3	4	5	6	7	悪い
	美しい	1	2	3	4	5	6	7	醜い
	清潔な	1	2	3	4	5	6	7	不潔な
	明るい	1	2	3	4	5	6	7	暗い
	強い	1	2	3	4	5	6	7	弱い
	重い	1	2	3	4	5	6	7	軽い
	うっとおしい	1	2	3	4	5	6	7	さわやか
	好ましい	1	2	3	4	5	6	7	好ましくない
	やさしい	1	2	3	4	5	6	7	こわい
	親しみのある	1	2	3	4	5	6	7	よそよそしい
	若々しい	1	2	3	4	5	6	7	年とった
	貧しい	1	2	3	4	5	6	7	豊かな
	騒々しい	1	2	3	4	5	6	7	静かな
	活発な	1	2	3	4	5	6	7	活発でない
	地味な	1	2	3	4	5	6	7	派手な
	悲しい	1	2	3	4	5	6	7	うれしい
	楽しい	1	2	3	4	5	6	7	苦しい
	愉快的な	1	2	3	4	5	6	7	不愉快的な

## 事後アンケート2

問2：一括再生のビデオクリップと、トピックに分かれたビデオクリップでは、どちらが学習しやすかったと思いますか？ またそれはどうしてですか？

一括再生のビデオクリップ

トピックに分かれたビデオクリップ

どちらも適切ではない

その他（ ）

理由：

問3：車いす使用者の支援について、今回のビデオクリップを見て初めて知ったことはありましたか？ また、それはどのようなことでしたか？

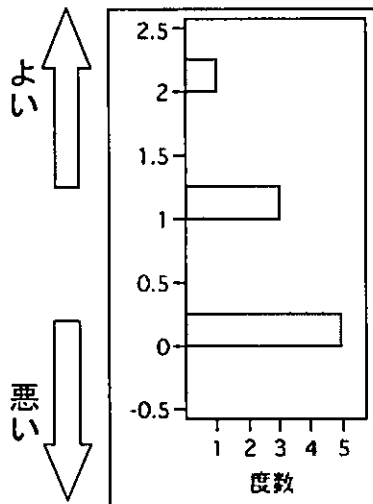
あった

なかった

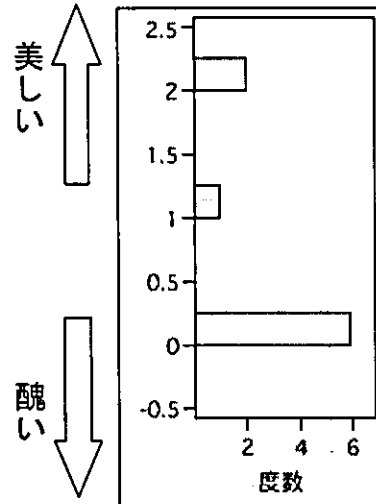
問4：あなたは、今回のビデオクリップのような教材を用いて学習するとすれば、どのような障害についてのビデオクリップが適していると思いますか？ （自由記述）

<資料2> ビデオクリップ視聴前後の車いすユーザに対するイメージの変化量

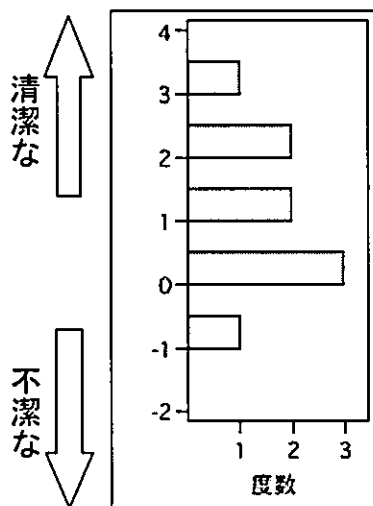
1. よい—悪い



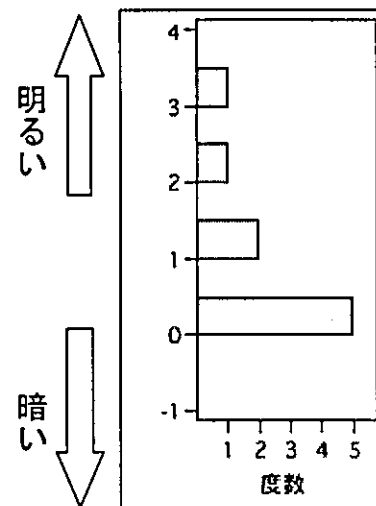
2. 美しい—醜い



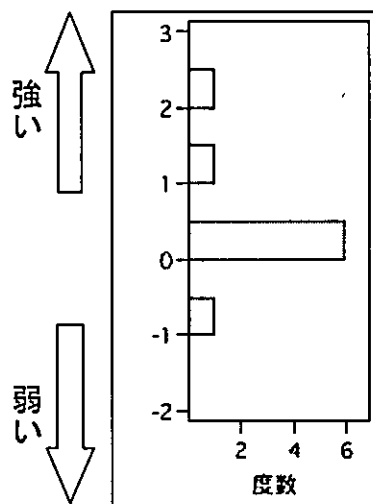
3. 清潔な—不潔な



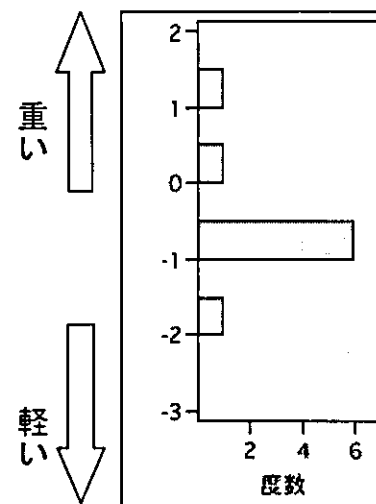
4. 明るい—暗い



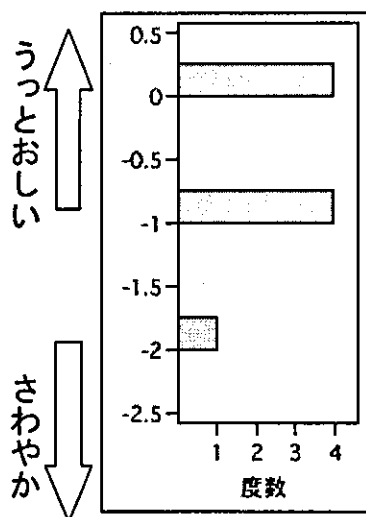
5. 強い—弱い



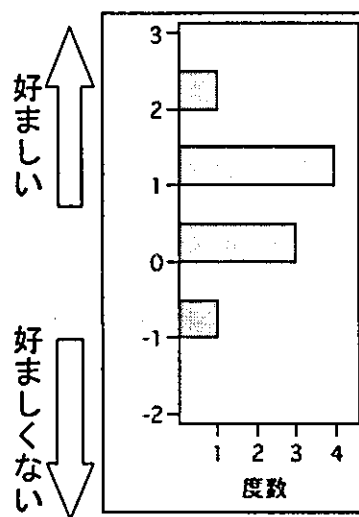
6. 重い—軽い



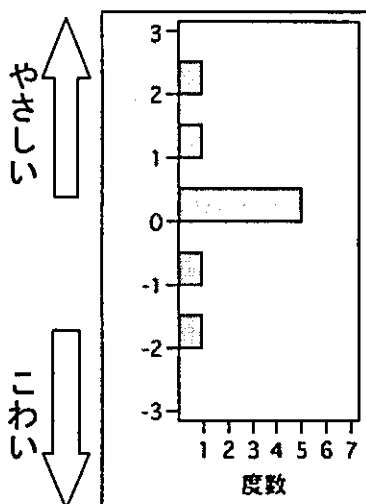
7. うっとおしい—さわやか



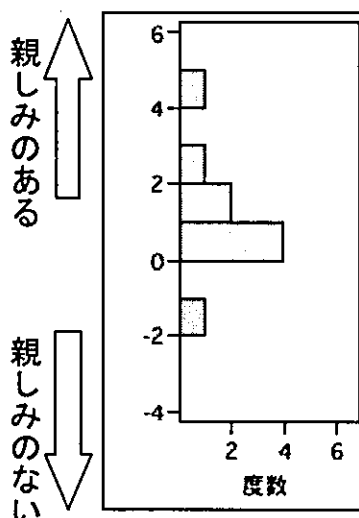
8. 好ましい—好ましくない



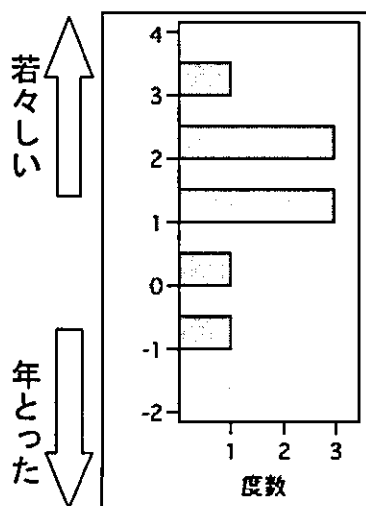
9. やさしい—こわい



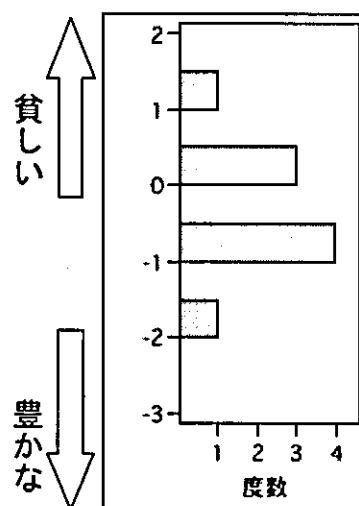
10. 親しみのある—よそよそしい



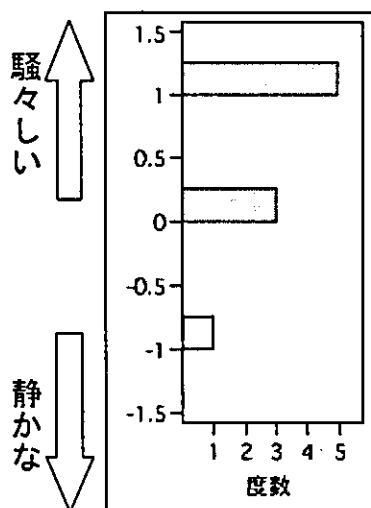
11. 若々しい—年とった



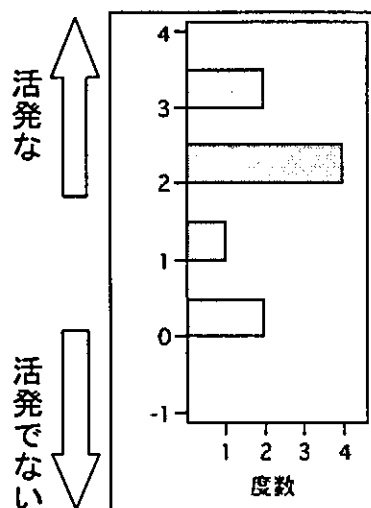
12. 貧しい—豊かな



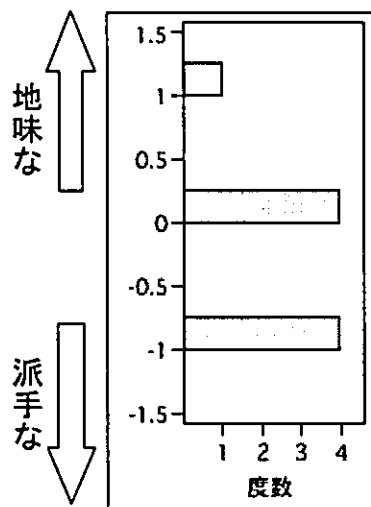
13. 騒々しい—静かな



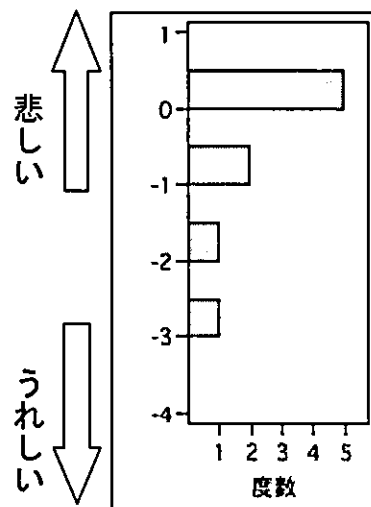
14. 活発な—活発でない



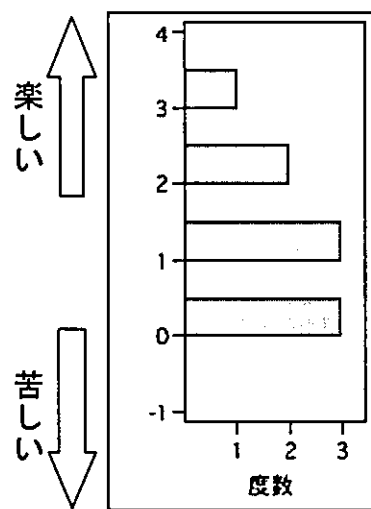
15. 地味な—派手な



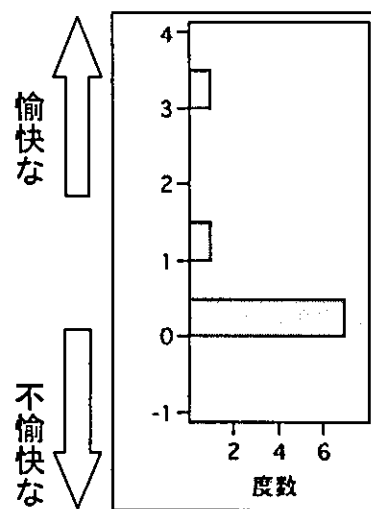
16. 悲しい—うれしい



17. 楽しい—苦しい



18. 愉快的な—不愉快的な





<資料> ビデオクリップ視聴後に研究参加者が答えた、車いすユーザ支援上のポイント

<Q>ビデオクリップを見て、車いす使用者を支援する上で重要だと考えたポイントをできるだけ多く書き出してください。

<A>

a)車いす介助の方法

<SS 1>

車いすへ移動の際は、一人の介助者が車いす利用者のわきの下から両手を入れ、手首をしっかり掴み、もう一人が足を持って持ち上げる。

介助者の車いす介助については、車いす利用者に直接具体的な介助方法を聞く。操作方法・車いすのスピードなど。

<SS 2>

介助者はあくまで利用者の指示に従いながら介助を行うこと。

ストッパーの on/off を的確に行うこと→安全確保

周りの一般通行者への安全配慮

<SS 3>

車いすの介助の方法については、まず第一に、車いすに乗っている人に「どのように介助したらよいのか」と尋ねて、その質問に応答する形で介助するのが良い。車いすを移動させる場合には、グリップを押し、止まる際には、足下にあるブレーキを引けばよい。

<SS 4>

車いすに移る際、体を持ち上げる時は、障害を持っている人の脇の下から手を入れて、手首をしっかり握ってあげること、また、もう一人は腰と膝の下のところに入れて支えること。(2人でやる)

かけ声をかけること(「せーの」「一、二、三」など)

足首のベルトはきつく、ウェストのベルトはゆるめに

<SS 5>

車いすへの移動は前後二人の介助者が必要、後ろの介助者は脇に手を入れ、使用者は両手をくんで、介助者の両手首を挟むように脇を締める。前の介助者は、膝の裏に片手、腰の裏にも片手を入れ、合図とともにゆっくり移動させる。

<SS 6>

固定用のベルトは、足首のものはきつくして、お腹まわりのものはゆるくする。

車いすから降りるときには2人の介助者が必要。一人は後ろから両脇に腕を差し入れ、もう一人が膝の部分から手を入れて、腰の部分を支える感じで手を添え、二人で持ち上げる

どのような支援が必要なのかは車いす使用者の方に直接たずねて、必要な事をする。特にブレーキなどは注意が必要

段差などがあると車いすの方は自分で動かしにくいので、注意していることが必要

<SS 7>

障害者がケアワーカーに対して行う作業の指示。

障害者とケアワーカーが息をそろえて、協力して作業を行う。

<SS 8>

介助の際には、使用者にききながら行えばよい。教えてくれるとおりに介助するのが良い。

移動法はまず一人が使用者の手首を脇の下から持ち、使用者は脇を締める。2人目はお姫様だっこの要領で抱きかかえ、息を合わせて移動。これを覚えておくとよいと思った。

<SS 9>

二人で息を合わせて、車いす使用者を持ち上げること。

b) ノートの取り方

<SS 1>

パソコンを利用して板書をとる。書ききれなかった部分は友達にコピーさせてもらう。

<SS 2>

音声入力のできるパソコンがあれば更にノートを取りやすいのでは？

あくまで本人がノートを取る方が良いが板書は介助者がとるべき。

個人によってやりやすい方法が違ってくる箇所なのでしっかりと利用者とコミュニケーションを取る。

<SS 3>

ノートについては、ノートパソコンを使用し、補えなかった部分に関しては、友達の手を貸してもらおうといった方法で対処している。キーの配列に関しては、ある程度まで覚えることができるので、タイピングについてのスピードは問題ない。

<SS 4>

パソコンを使う。(市販のもので大丈夫) 足りない所は友人からのノートのコピーなどで補う。使うキーが1つですむようにカスタマイズ。指に力が入らないので、棒を手に固定し、それでキーをたたく。

<SS 5>

持参したノートパソコンを使ってノートを取った。取る内容は先生が黒板に書いた内容や、話した内容である。授業内に取りきれなかったものは友達に写させてもらう。

<SS 6>

授業にはパソコンを持ち込んでノートの代わりとする

パソコンへの入力バンドを使って固定したペンのような棒でキーボードをたたく事で行う

試験の対策としては、友達にノートのコピーを取らせてもらうことも必要

<SS 7>

友人の協力

パソコン(ワード)の障害者にとっての使いやすさ

<SS 8>

パソコンを使ってメモを取る。取りきれない分は友達の手をコピー。

<SS 9>

講義の録画、録音。

c)エレベーターを利用した移動

<SS 1>

出入りをスムーズにするために、全身の映る大きな鏡が必要。

<SS 2>

エレベーターの中の鏡は、車いすの幅を認識するために重要な役割を果たす。

一般利用者は何かとせかせかとエレベーターを使いがちだが、車いす利用者と同乗する場合は、一つ一つの何気ない動作の中にも時間がかかることを前もって認識しなければならない。

<SS 3>

介助の人に手伝ってもらおう。

<SS 4>

全身が移る鏡が貼ってあること（真向かいの壁に） → 人にぶつからず、また出口の幅が自分で見られるように（半身鏡では×）

<SS 5>

ボタンの位置、車いすに乗ったまま、手が届く方がよい。

エレベーターを利用する際には、前方から入るので、出るときにはバックになる。そのため、エレベーター内に姿見鏡があると便利。

<SS 6>

エレベータに設置してある鏡は車いすの方が出入りをする際に全体の幅と車いすの幅を確認する際に使用するため、全身が映るタイプのものが望ましい

車いすの方が届く位置にボタンがあると便利

<SS 7>

記述なし

<SS 8>

全身がうつる鏡があると便利

ボタンの高さが高すぎないようにするとよい

<SS 9>

全身が映る鏡をエレベーターに設置する。降りる際、後ろ向きで降りるため、車いすの幅が把握でき、人にぶつかるのを防ぐ。

d)階段昇降機を利用した移動

<SS 1>

キャンパス内にて階段昇降機を利用の際は、内線で学事に連絡する。実際移動する時、介助も昇降機に乗る。

<SS 2>

昇降機利用中の安全確保。（車いすのストッパーはかかっているのか？）

「行きますよー。」などの声かけ。

<SS 3>

階段昇降機を利用する場合には、あらかじめ、学事センターなどの事務施設に連絡する

必要がある。また、昇降機に乗る場合には、必ず介助をしてくれる同乗者が必要である。降りる場合にも同乗者に介助してもらう必要がある。

<SS 4>

職員を呼ぶための電話、落ちないようにストッパーなどをきちんとかけること、ゆっくり動かすこと

<SS 5>

内線で職員を呼び、動かしてもらう。

<SS 6>

階段昇降機に乗る際にも介助が必要となる

階段昇降機は使用に学事センターなどの助けが必要となってしまうので、もう少し利用しやすくする必要があるかもしれない。

スロープを付けてしまえば、本人にとっては周囲の助けが不要となり楽なことかもしれない

<SS 7>

記述なし

<SS 8>

学事に言うと思える

利用できる人が一緒に乗る

<SS 9>

昇降機に乗る際、後ろから車いすを押すこと。

#### e) 食事の際の工夫と介助

<SS 1>

介助者は、車いす利用者が食事をとりやすいように、料理に手を加える。(肉であったら一口サイズに切り、魚であったらほぐすなど) 指を動かすことができないので、マジックテープのついたバンドで手を固定し、その中にフォークやスプーンを入れて使う。

<SS 2>

「どのくらいの大きさに切れば食べやすいのか」など利用者の情報を把握。

「これでいいですか？」など利用者のニーズをくみ出す。

<SS 3>

食事の際には、指が動かない場合には、食べ物を指にはさんで食事をする。昼は生協などで食事を取る。また、レストランなどでステーキのような食べるときに困難な場合には、介助してもらい、手には、マジックテープを装着し、オリジナルのスプーン、またはフォークを用いて食事を取る。

<SS 4>

指に力がいらなくても、腕は動く場合は、サンドイッチやおにぎりであれば指に挟んであげる。普通の食事の場合は、障害を持っている人自身が使いやすいように改良した食器を手で固定し、刺したり、すくったりして食べやすいように大きなおかずは小さく切っ

<SS 5>